

戦国時代における楚の都市と経済

柿 沼 陽 平

はじめに

戦国時代の南方中国には、楚という大国が存在した。楚は荆ともよばれ、中原諸国は春秋時代頃からその圧力に苦しんでいた。伝世文献の『史記』や『戦国策』等を見ると、戦国時代の楚（すなわち戦国楚）は、ともかく強国として描かれている。とくに戦国中期には、燕・斉・趙・魏・韓は数十万人の「帯甲」や「武士」をもつとされる（『戦国策』齊卷一二六、齊卷一五八、齊卷一七二、魏卷三五八、韓卷三八七、韓卷三九三、魏卷二二一、魏卷三二八、燕卷四四二）¹。一方、楚は「持戟百萬（『戦国策』秦卷一〇八）」、「奮撃百萬（『戦国策』秦卷四七、秦卷九四）」、あるいは「帯甲百萬（『史記』卷四〇楚世家頃襄王条、『史記』卷六九蘇秦列伝、『戦国策』趙卷二七六等）」などとされる。これと同等以上なのは、「帯甲百餘萬（『戦国策』趙卷二七六）」とされる全盛期の趙か、「帯甲百餘萬（『史記』卷七〇張儀列伝、『戦国策』韓卷二九三）」、「虎賁の士百萬（『戦国策』楚卷一九六）」、あるいは「名師數百萬（『戦国策』秦卷一〇七）」などとされる秦くらいのものであった。後述するように、戦国七

雄のこれらの兵力は、かなり誇張されたものではあるが、七雄間の兵力比をしめすものとしては参考になろう。

だが戦国楚は、かくも強国であったにもかかわらず、戦国中期（とくに懷王期）以降、度重なる秦の侵略に苛まれ、最終的に滅ぼされた。では、楚は一体なぜ滅ぼされてしまったのか。

『史記』巻四〇楚世家をみると、懷王期以降の楚には、ほぼ見せ場がない。しかしこれは、懷王期以降を楚没落期とする楚世家特有の筆法にも一因があろう。²⁾ 現に、戦国中期以降の楚は、同時に東方への進出をも図っており、戦略上つねに後手後手に回っていたわけではない。しかも楚は、秦に最後まで抵抗し、將軍王翦は、秦のほぼ全軍にあたる六〇万人を動員し、ようやく楚を滅ぼした（『史記』巻七三白起王翦列伝）。つまり楚の力量は、戦国末期においてもなお、あなどれないものだった。にもかかわらず、楚が秦に滅ぼされた理由は、一体どこにあったのか。そもそも秦が、合従連衡の世界を勝ち抜き、韓・魏・趙・楚・燕を武力で、斉を外交で降した以上、勝敗の直接的な要因は、軍事力と外交力の差に求められよう。『史記』や『戦国策』にも、秦が軍事・外交の面で、権謀術数に長けていたことをしめす記載が散見する。だが問題は、秦楚間のそのような差異が、具体的にいつ、なぜ、どう生じたかである。これに答えるには、秦の勝因と楚の敗因の両方を吟味せねばならない。そこで本稿では、秦の勝因に関する別稿を念頭に置きつつ、³⁾ 先行研究を検証し、改めて経済史的観点から楚の敗因を闡明したい。

第一節 戦国楚の敗因に関する諸説

一・天命喪失説

「楚の敗因」としてまず指摘されるのは、楚の「天命」喪失である。藤田勝久氏によると、『史記』には天人相

関説と諸国興亡を結びつける史観が伏在する⁽⁴⁾。たとえば『史記』卷一五・六国年表は、秦が徳政・軍政面で劣る西方僻遠の小国にもかわららず六国を併合できた原因として、秦が天然の要害に位置するだけでなく、「天命」に支えられた点を挙げる。『史記』卷四四魏世家太史公曰も、秦の六国統一を「天」に支えられた結果とする。

天方^まに秦をして海内を平らかにせしむるも、其の業未だ成らず。

これは裏を返せば、楚の「天命」喪失を意味する。ただし、『史記』所見の「天」は、「儻^あいは所謂天道是か非か」〔『史記』卷六一伯夷列伝〕の一句が象徴的にしめすごとく、人知を越えたものをさす。よって本説は、「楚の敗因」に対する一種の不可知論であるともいえる。このような司馬遷の秦王朝史観の成立背景に関しては鶴間和幸氏の専論を御覧頂くこととし⁽⁵⁾、ここでは次に、「楚の敗因」に関する具体的な仮説を瞥見していくことにしよう。

二・人心離反（政治腐敗）説

秦が六国併合できた原因として楊寛氏は、①人心掌握（軍主力を担う農民と地主階級との間の矛盾解消）の成功、②適確な占領地支配（被占領地の罪人の赦免と既得権益層の駆逐）、③社会経済の発展、④統一を求める民の意思を挙げる⁽⁶⁾。初山明氏によると、③④は戦国後半期の一般的趨勢にすぎない。②に関して、睡虎地秦簡「語書」等を見るかぎり、秦の旧楚地支配が順調だったとは断定できない。①も説明が表面的で、秦側の実態も不明である⁽⁷⁾。ただし、楊氏は①について、わざわざ楚の例を挙げ、楚が貴族腐敗と国内分裂で人心掌握に失敗したとする。この点は、「楚の敗因」に係するものとして、無視できない。現に、楚都郢の占領（以下、拔郢）をなしたげた秦將白起も、人心離反などにより、楚が事前に弱体化していたとする。

是の時、楚王、其の國の大なるを好み、其の政を恤^{うれ}えず。而して群臣、相い妬むに功を以てし、詔諛、事を用い、

良臣、斥疎せられ、百姓、心離れ、城池修まらず。既に良臣無く、又た守備無し。……楚人は、自ら其の地に戦い、威な其の家を顧み、各々散心有りて、鬪志有る莫し。是を以て能く功有るなり（『戦国策』秦巻二〇四）。

楚兵に鬪志がない点は、戦国後期の説客の張儀も指摘している。張儀は秦のため、魏王へ向かってこう語りかけている。

楚は富大の名有りと雖も、其の實は空虚なり。其の卒は衆多なりと雖も、然れども軽々しく走り北げ易く、敢えて堅く戦わず（『戦国策』魏巻三二一八）。

だが第一に、そもそも人心離反は曖昧な基準で、秦国―秦人の関係と、楚国―楚人の関係とを比較するのは困難である。第二に、秦将白起個人の対楚認識を、そのまま鵜呑みにはできない。第三に、白起の発言（前二七八年頃の拔郢直後⁸）から楚滅亡（前二二四年頃）まではなお五〇年以上ある。これでは、楚が人心を欠いた状態でかくも長期間存続した理由が判然としない。第四に、戦国末に秦から楚へ逃亡した者も少なくなく（岳麓書院蔵秦簡「多小未能与謀案」）、秦が楚よりも全面的に住みやすい国だったとは断定できない。第五に、楊氏が人心離反の原因とみる「貴族腐敗と国内分裂」は、君権を阻害する大貴族の存在を前提とする。しかし、楚における君権の強弱にもなお議論が絶えない（中央集権化失敗説参照）。これより、人心離反を楚の敗因とする説には、もう少し具体的な基準と議論が必要と思われる。

三．楚懷王無能説

戦国楚は悼王期に呉起を起用して変法を断行した。呉起の起用年代には諸説あり、⁹変法の内容も概略が知られるのみだが、¹⁰ともかく楚は強化され、魏を討伐し、楚軍は大河（黄河）に達した（『戦国策』齊巻一五八）。また

「南は百越を【并せ】、北は陳・蔡を并せ、三晉を却け、西は秦を討ち（『史記』卷六五孫子呉起列伝）」、「南は蠻越を并せ、遂に洞庭・蒼梧を有ち（『後漢書』卷八六南蛮西南夷列伝）」、「兵は天下を震わせ、威は諸侯を服せし（『史記』卷七九范雎蔡沢列伝）」めた。悼王・呉起が死ぬと、楚は一時混乱したが、威王期に再度盛んとなった。だが懐王が即位するや、楚は「商於^①」や漢中を失った。懐王は屈原らの忠言を聞かず、挙げ句の果てには、懐王自身が秦の捕虜となった（『史記』卷四〇楚世家）。かくて楚は、大混乱に陥つたとされる。

以上の伝世文献による楚史を鑑みると、楚は懐王期以後急速に弱体化し、秦に圧倒されたごとくである。かくて「楚の敗因」を懐王の無能さに求める説が出てくる。『史記』卷一三〇太史公自序は、楚の一敗因として、とくに、懐王・頃襄王が讒言を信じ、屈原をしりぞけた点を挙げる。

懐王忠臣の分を知らざるを以て、故に内は鄭袖に惑い、外は張儀に欺かれ、屈平を疏^{うと}んじ、上官大夫・令尹子蘭を信ず。……懐王客死し、蘭、屈原を咎め、諛を好み讒を信じ、楚、秦に并さる。

なるほど、懐王はたびたび秦にたまされ、政治的・外交的敗北を重ねた。その際に屈原は、懐王が佞臣に惑わされ、「浩蕩（思慮の無い意）」として「民心」を察しえないことを嘆いた（『楚辞』九章懷沙賦）。『楚辞』九章離騷にも、古の名君の堯・舜と暴君の桀・紂とを対比しつつ懐王を諷める文言がみえる。

だが、この説には疑問もある。第一に、始皇帝死後に秦を討つた項梁・項羽らは、楚王の子孫を担ぎ上げて「懐王」とよんだ（『史記』卷七項羽本紀）。かりに戦国楚の懐王が真に無能で、楚滅亡の責任を彼一人に帰するのが当時の常識だったならば、戦国楚の名族項氏がわざわざ「懐王」を旗頭するであろうか。第二に、前三一八年頃、東方六国と匈奴は合従して秦を攻撃した（楊寛『戦国史料編年輯証』周慎諶王三年条所引史料^②）。当該合従軍は結果的に破れたが、そのとき「従長（合従の長）」となった懐王の外交力を無視はできない。第三に、懐王は

前三二二年頃に魏を襄陵で破り（楊寛『戦国史料編年輯証』周顯王四六年条所引史料）、東北方面へ領土を拡大した。つまり懷王は、必ずしも一方的に領土を失陥しつづけたわけではない。第四に、懷王無能説は、楚の国策が無能な懷王の一存ですべて決定されたとの前提に立つ。だが楚王の周囲には有能な家臣団や説客らもおり、楚の国策は当然彼らの見解と議論に基づいていた。その過程で、屈原も失脚した。その際に、家臣団・説客間の力関係を無視することはできない。第五に、戦国楚は懷王以後連戦連敗したものの、その全責任を歴代楚王個々に帰することはできない。さもないと、楚の歴代の王はみな暗愚だったことになり、なぜそんなことが起こりえたのか、楚の家臣団はなぜ愚王に盲従するのみだったのが別途問題となる。このように考えてゆくと、楚王の背後には、むしろ王一人の力ではどうにもならない社会の流れがあり、それが楚に敗北への道を歩ませたとの疑念が禁じえない。

四・巫風重厚説・律令未整備説

戦国楚のもつ重厚な迷信・巫風（及び律令制の未整備）を、楚滅亡の重要な原因とする楊興華氏の説もある⁽¹³⁾。なるほど、秦の六国併合の背景には商鞅変法以来の律令制があった。一方、近年の楚簡研究をみると、楚は、卜筮祭祷簡や「日書」に代表される強力な巫風を有した。ゆえに戦国秦は前二二七年頃に、楚の旧都郢付近で「語書」を發布し、「楚の」民の郷俗「を」悪俗「として指弾し、（秦の）濃律令」の重要性を嵬番夫・道番夫に説いた。このことは旧楚地に対する秦の法的支配の難航ぶりを物語る⁽¹⁴⁾。しかも近年急増する楚簡には一向に律令の痕跡がみえず、ゆえに戦国楚に「律令」はなかったとの説もある⁽¹⁵⁾。また楚官にも巫風の影響が窺える。たとえば「視日」は、本来神判を司る巫で、戦国中期頃に定曆択吉を司る官となり、戦国中期の包山楚簡中では司法官の役を、

陳勝・呉広の乱では將軍役を担った⁽¹⁶⁾。戦国楚の懷王も、戦時に巫祝の決断を重視したことが知られる⁽¹⁷⁾。要するに、伝世文献・出土文字資料の双方をみても、戦国楚が重厚な迷信・巫風を有した点は否定しがたいのである。

だが第一に、包山楚簡等にもみられるとおり、戦国楚でも、独特な方法で裁判が機能していた。その法が、秦の「律令」よりも未整備だったとの証拠はない。第二に、日者は楚地以外にも齊・秦・趙におり〔『史記』卷一三〇太史公自序）、秦簡・漢簡にも「日書」は存在した⁽¹⁸⁾。よって、日者や「日書」の存在は、楚だけが濃厚な巫風を有したという証拠にはならない。現に、戦国秦でも、「軍巫」が裁判に関与した例がある（岳麓書院藏秦簡「多小未能與謀案」）。第三に、秦に滅ぼされた戦国魏にも律令はあり（睡虎地秦簡「為吏之道」魏戸律等）、律令が備わっていても滅ぼされた国はある。第四に、秦は各地の習俗をふまえた法の適用もあり、秦律の運用は地方人士の名声如何でも変化した。以上四点は、①巫風が楚の国策にどれほどの悪影響を与えたか、②「律令」の有無とその規律内容、③律令の有無と七雄の勝敗の相関性の三点が、今なお不明瞭であることを物語る。これらの点を闡明し、重厚な迷信・巫風（及び律令制の未整備）を楚滅亡の主因とみなすには、少なくとも明瞭な「律令」の定義に基づき、戦国諸国の「律令」の体系的比較が必須である。だが戦国秦以外の法制史料を欠く現在の研究水準では、それはむずかしい。このような意味で、本説にはなお多くの検討の余地があるといわざるをえない。

五・中央集権化失敗（呉起变法失敗）説

顧炎武はかつて、宗姓氏族の繁栄した春秋時代以前に比し、戦国時代には君権が一律に強化されたとした〔『日知録』卷一三周末風俗）。だが春秋時代に関してはともかく、⁽²⁰⁾戦国時代に関しては近年、各国で中央集権化の度合いが異なるとの見方が有力である⁽²¹⁾。中でも宇都木章氏は、戦国楚における昭氏・屈氏・景氏等の大世族の存在

を指摘し、世族が軍権を有したとまではいえないと留保しつつ、こう説明する。世族は、楚国の政治体制に付随しつつ余命を保ち、政界に進出し、軍事的活躍をした。だが懐王期以降は力を失い、代わりに王の側近勢力（春申君等）が台頭した、と。²⁰ また、「楚、呉起を用いず、而して削乱す（『韓非子』問田篇）」のごとく、戦国楚で中央集権化を目指した呉起変法が失敗に終わったとする史料も、戦国楚の中央集権力に疑念を抱かせる。盧昌徳氏も、懐王期に屈原の政治改革が頓挫し（『楚辞』九章惜往日）、「繩墨（法度の意）」による政治が実現していないことから（『楚辞』離騷）、呉起変法は呉起死後に失効したとする。そしてその理由を、楚が秦以上の奴隸制を有し、既得権益層の解体が進まなかった点に求め、前掲『戦国策』秦卷一〇四の白起の言を傍証とする。²³ これらの説によると、戦国楚は呉起変法に失敗し、最後まで世族に邪魔され、中央集権化を達成できなかったこととくである。かくて楚の滅亡を中央集権化の失敗（＝呉起変法の失敗）に求める説が登場する。

なるほど、近年の出土文字資料研究の中には、これを裏付けるかのごとき説もある。何浩氏は、楚の懐王期の訴訟案件・卜筮祭禱記録である包山楚簡等をふまえ、有力世襲貴族を漠然とさす「世族」・「公族」・「有力氏族」等でなく、彼らの一部が拜命する「封君」に着目する。そして戦国楚（恵王期～幽王期頃）の「封君」の特徴として、①六〇名以上にのぼる点、②中原諸国の封君が辺境に偏在したのに対し、楚の封君は淮水―漢水流域間に多い点（都心・辺境は問わない）、③個々の力量は弱小な点、④爵位・官職とは異なる栄誉として世襲される点、⑤春申君等の例外を除き、基本的に封地をもち、「封地名十君」と呼ばれた点、⑥封地内での統治権（属民の生殺与奪権）・武装権・行政権・兵権・経済特権（属民に対する賦税徴収権等）を有した点、⑦宣王期以降登場する「侯」と別物（両者の違いは不明）である点等を指摘する。その上で、戦国封君は呉起変法後一時的に制限されたが、その人数は結局悪性膨張を続け、楚の統一の軍事編制を妨げ、楚滅亡の致命的一因となったとする。²⁴ 以

上の何説も、中央集権化の失敗を楚の敗因とみなすものである。

しかし、論者の中には、つとに上記の説を批判し、楚が春秋時代以来強力な君権を有しつづけたとする者もいる。野間文史氏は、歴代楚王が世族抑制策をとったとし、所謂呉起変法に關しても、伝統的な世族抑制政策を徹底化・法令化したものとする⁽²⁵⁾。斉思和氏は、春秋楚における世族の強さを認めた上で、戦国楚が最後まで強勢だったことから、呉起変法は成功したとする。「封君」に關しても前掲何浩説と別の見解があり、近年の出土文字資料研究をふまえたものである。すなわち陳偉氏は、懷王前期の包山楚簡所見の「封君」について検討し、①楚の地方行政制度の基層單位が邑（城市外の区画）と里（城市内の区画）である点、②邑・里の上に「啟」「或」、その上に「縣」がある点、③六邑をもつ封君の例（包山楚簡第一五三〜一五四簡）がある点、④封君の封地名がしばしば楚県名と同じである点、⑤封君も中央政府の司法的支配を受けた点等を指摘する。そして懷王前期の封君はおもに県以下の小規模な封地を有し、前漢の列侯に似た弱小勢力だったと結論づける⁽²⁷⁾。この陳偉説は、戦国楚における県制の存在を前提にする点等で疑問もあるが、大筋では首肯される。また鄭威氏もこう論ずる。すなわち、包山楚簡・曾侯乙墓楚簡・新蔡楚簡等には共通の封君が登場し、封君の世襲制限を図った呉起変法は一部失敗したようである。だが、封君の人数は世襲によつて増えつづけ、その反面、封君個々人の封地面積は縮小し、その力は細分化（弱化）されていった。その意味で、中央集権化を意図した呉起変法は成功したともいえる、と⁽²⁸⁾。以上の諸説によると、戦国楚の王権は必ずしも弱くなく、呉起変法も失敗したとは断定できない。

しかも、君権と世族（封君を含む）の二項対立の図式自体にも疑問はある。宇都木氏は、世族の力を認めつつも、楚王が自己権力の強化と維持のために世族や封君を利用したとものべている。また岡田功氏によると、呉起変法は「戦鬪之士」の維持費調達を目的とし、疎遠化公族を廢し、近親化公族（昭氏・景氏ら）と莫敖（王族を司

る屈氏)を登用する改革で、経済的・下部構造改革には至らなかった。ゆえに楚では共同体の解体が進まず、小経・管農氏も析出されず、秦ほどの世族解体は進まず、近親化公族の支配が行なわれつづけた⁽³⁰⁾。これらの説を鑑みると、世族内にも様々な集団があり、君権と世族(もしくは君権と封君)の単純な対立図式には疑問も残る。戦国楚には「封君」以外に「侯」等もあり、彼らの実態も不明である。細分化された封君も、同氏集団の世族意識を共有しつづけた可能性が否めず、すぐに中央集権化が発生したとも限らない。このような意味で、楚の敗因を中央集権化の失敗(呉起変法の失敗)に求める説には、なお検討の余地がある。

六・地理的要因説

戦国楚の立地条件自体が敗因であったとの仮説もある。そもそも『史記』卷六秦始皇本紀太史公曰賈誼『過秦論』は、秦の勝因を歴代秦王の聡明さに求めるのではなく、秦地が天然の要害であった点に求める。『史記』卷一五・六(国年表も、既述のごとく)、秦が天然の要害に位置するだけでなく、「天命」に支えられたとし、秦の地政学的利点を前提としている。前漢文帝期の賈山も、「秦地の固」等の好条件を有する秦帝国が陳渉・劉邦に敗れた理由を模索しており(『漢書』卷五一賈山伝)、「秦地の固」の有利さが前提視されている。前漢の高祖劉邦も、婁敬・張良の進言をきき、地政学的利点ゆえに長安を都とした(『史記』卷九九劉敬列伝)。

このように秦地の守りやすさは、戦国秦漢時代の共通認識だった。逆にいえば、敗北した楚側には、秦ほどの地の利はなかったらしい。現に、戦国中期の楚は、秦・韓・魏・越等と国境を接し、それらの同時攻撃を受ける恐れもあった。よって楚は守備兵を分散させねばならなかった。たとえば越王無疆は、そのことを理由の一つとして、楚と交戦した(『史記』卷四一越王句踐世家)。『商君書』兵守篇も、「四戦の國(多方面に敵をもつ國)」

の地政学的危険性を指摘し、その場合には守備兵を分散させず、拠点防衛に徹するべきとする。つまり、商鞅以降の秦の為政者も、楚の欠点を見抜いていた可能性が高い。これによれば、秦が東方進出に集中できた一方、楚の領土拡大には地政学的困難が伴ったと考えられる。

ただし、前掲『過秦論』は、じつは地の利を有する秦帝国が短期間で滅びた例を挙げ、その原因として「仁義」の欠如を指摘し、地理的要因のみを秦の勝因とはみなしていない。実際に、統一秦の末期に、陳勝・呉広は、陳より函谷関に侵入し、項梁・項羽・劉邦らが秦を滅ぼした。これらの事例を鑑みると、秦地と楚地の地政学的優劣は、必ずしも絶対的ではない。

以上本節では、楚の敗因に関する主要な諸々の仮説を検証した。既述のごとく、秦は戦国六国を軍事力と外交力で統一したが、問題は秦楚間の力量差が具体的にいつ、なぜ、どう生じたかである。そこで本節では、諸仮説の検証を通じて、秦楚間の力量差を生んだ主因を求めた。その結果、諸仮説の多くが、なお検討の余地を残すことが確認された。しかもそれらは、楚滅亡の十分条件とはなりえない。かりに上記仮説に関する多くの疑問点が解消されたとしても、そのこと自体は論理上、必ずしも他の要因の存在を否定することには繋がらない。そこで次に、より重要な「楚の敗因」をもとめ、楚の軍事力と外交力を支えた経済に着眼したい。

第二節 楚地経済の特徴

一・楚地の人口

戦国楚の経済力を探る上で、まず注目すべきは人口である。人口の多寡こそが、経済力を根底で支え、兵力の

多寡にも関わるからである。ところが戦国楚の具体的な人口統計に関する史料は現存しない。戦国時代の総人口には一・五千万〜二千万人説⁽²¹⁾、二千万人説⁽²²⁾、三千万人説等があるが⁽²³⁾、詳細はよくわからない。そこで漢代人口の推移をみると、前漢時代にはまだ淮河以北の人口が多く、淮河以南の人口は少なかった(『漢書』卷二八地理志)。桑原隲蔵氏によれば、長江流域の文化・戸口数・物力などが黄河流域を凌駕するようになるのは四世紀初頭の晋室南渡以降である⁽²⁴⁾。すると、戦国期の長江中流域の人口も、中原に比して多くなかったといえよう。現に、江村治樹氏の都市遺址分布に関する研究も、戦国楚都市遺址の少なさをしめす⁽²⁵⁾。

この推測を裏付ける史料として、長江下流域〜淮水流域間の前漢前半期の人口に関する出土文字資料にも注目される。それらは『漢書』地理志以前の状況を伝える。中でも前漢景帝〜武帝期の安徽省天長市漢簡「戸口簿」⁽²⁶⁾「算簿」は県内各郷の戸数・口数などを整理したもので、前漢武帝期の湖北省荊州市荊州区紀南鎮松柏村漢墓出土簡牘は南郡各県の統計を整理したものである⁽²⁷⁾。これらの人口統計は『漢書』地理志の統計より少ない。これより、長江下流域〜淮水流域間の人口は、やはり漢代を通して増加し、逆に、漢代以前の当地の人口は、『漢書』地理志所見の人口以下だったと考えられる。

以上の検討によると、戦国楚の人口は、中原に比して多くない。『呂氏春秋』開春論貴卒篇「呉起、荊王に謂いて曰く「荊、餘り有る所の者は地なり。足らざる所の者は民なり……」」や後掲『史記』卷一二九貨殖列伝「楚越の地は地廣く人希^{まれ}」といった史料は、このような楚地の状況を描いたものである。すると、戦国楚が「帶甲百萬」を有したとする伝世文献には、疑問も残る。むしろ松柏村漢墓出土簡牘によると、前漢南郡の卒の動員可能数は一万人程度で、長江中流域全体でも数万人が限界とみられる。戦国楚と前漢初期の徴兵率に大差があったとの証拠はなく、むしろ戦国期の人口の方が漢代よりも少なかったとみられるので、戦国楚の西方防衛軍も同規模

以下であろう。人口密集地帯の陳や寿春も、せいぜい郢と同様、各々数万程度程度の動員が精一杯であろう。現に、頃襄王は拔郢直後、「東地の兵を収めて十餘萬を得」て秦を攻撃し、失地回復を図った（『史記』卷四〇楚世家）。また戦国末期に、秦の李信は二〇万人を率いて寿春遷都後の楚を討った。この時、楚国討滅を目的とする秦が、わざわざ危険を冒してまで、楚軍未滿の兵数を動員するはずはない。よって、楚軍は、李信軍より少なく、やはり十数万程度であったと思われる。これより、戦国中期の楚は、最大三〇万人弱（東漸後は十餘万人）の軍を有したと推定される。

ちなみに、前漢初期の馬王堆帛書「戦国縦横家書」第二六章によると、前二七三年以降の某時期に秦が魏都大梁を攻めた際、大梁以西の魏地にはなお一万户の大県が十七、市をもつ小県が三十余⁽³⁸⁾あった。戦国魏・李悝の政策案「盡地力之教」は、一戸あたり五人の核家族を前提としているので（『漢書』卷二四食貨志上）、一戸当たりの成年男子を一〇二名とすれば、このころの魏は二〇〇三〇万の軍を動員できたはずである。これより、拔郢直前の楚と魏の兵力は、実際にはほぼ同程度だったと思われる。

以上、戦国楚の人口は、中原に比して多くなく、長江中流域の地域（郢など）よりも、長江上流域（淮水流域間の地域（陳、寿春など）の方が人口密集地帯で、戦国楚の総兵力は二〇万〇三〇万人（東漸以後は十餘万以下）だったことを論じた。すると、楚の兵力は、「帶甲百萬」に遠く及ばぬこととなる。また、伝世文献で兵七十万を擁するとされる魏も、実際には三〇万人の動員が精一杯だったと考えられる。ただし、魏は位置的に、四方八方を他国に囲まれており、楚以上に兵を分散させねばならなかった。その意味では、楚を魏以上の軍事大国とみる伝世文献は、誤りではなからう。ともあれ次に、かかる人口に立脚した楚地経済の特徴をみてみよう。

二・楚地の農業

楚地（とくに江南一帯）の農業は一般に「火耕水耨」と表現される。その実態には諸説あるが、⁽³⁹⁾中でも渡辺信一郎氏の説は注目に値する。それによると、漢・六朝期の江淮一帯では、①高度な水利施設を伴う新田造成期の農法（火耕水種・火耕流種等）と、②焼畑農耕（膠田）が営まれた。そのうち②は、溪水等を利用する山地の焼畑（唐代以降の畝田・刀耕火種等）と、低平地での焼畑に細分され、これらの焼畑が慣用的に「火耕水耨」と総称された。⁽⁴⁰⁾

このような江南農業の特徴をふまえ、まず楚地における農地の広さをみると、残念ながら、戦国楚の農地の平均面積を明示する史料はない。だが、前漢文帝・景帝期の江陵鳳凰山第十号漢墓簡牘「鄭里稟簿」には、「鄭里」という里に百人強が居住し、労働人口（能田）は一家に二〜三人、耕地面積は一家に一〇〜数十畝（平均約二五畝）であつたことが明記されている。ここでいう江陵鳳凰山漢墓は、戦国楚の紀南城内に位置する。「鄭里稟簿」によると、各農家には、耕地面積一畝ごとに一斗の種料が貸与された。戦国秦の睡虎地秦簡「秦律十八種」倉律（第一〇五〜一〇六簡）にも、作付種目ごとに種料貸与を規定した条文があり、稻・麻は毎畝二と三分の二斗、禾・麥は毎畝一斗、黍・荅は毎畝三分の二斗、菽は毎畝半斗とされ、「美田（畝単位収穫高の高い肥沃な田）」に対する播種量は上記未満でもよいとされていた。⁽⁴¹⁾一方、北魏・賈思勰『齊民要術』種穀篇は、前漢武帝期以来の規定とされる新畝制（二四〇歩Ⅱ一畝）に基づき、播種量を良田は五升（つまり半斗）、薄田は三升（つまり〇・三斗）とする。かりに「秦律十八種」倉律や「鄭里稟簿」が所謂旧畝制（百歩Ⅱ一畝）を前提とした場合、百歩の地に一斗以下が播種される計算となり、二四〇歩の地に半斗〜〇・三升を播種する『齊民要術』種穀篇の数値と異常に乖離する。ゆえに渡辺信一郎氏は、「秦律十八種」倉律や「鄭里稟簿」は前掲『齊民要術』種穀篇と同様、新

畝制に基づくとする⁽⁴²⁾。前漢前半期の銀雀山漢墓簡牘「孫子兵法」や張家山漢簡「算數書」も新畝制を前提としており、新畝制の成立が漢初に遡ることは確実である。すると、前漢文帝・景帝期の南郡紀南城周辺の民は、新畝制（二四〇歩＝一畝）換算で、平均約二五畝の耕作面積を有したことになる。ちなみに、三国時代の長沙走馬樓呉簡「嘉禾吏民田家莧」をみると、民は平均一〇・五町、平均三八・六畝を有した。阿部幸信氏によると、長沙付近の地には起伏があり、一家の所有する田地は複数散在し、田地一枚一枚が「町」とよばれた。そして耕地面積は毎町平均六・二四畝で、総計すると各家平均三八・六畝だった⁽⁴³⁾。すると、前漢初期～三国時代の江陵・長沙付近の家々は、平均約二五～三九畝の耕作面積をもっていたとまとめられる（走馬樓呉簡の場合は米田）。

以上の数値に関連するものとして、陽武県戸牖郷（現在の河南省新郷市原陽県）出身の陳平の例に注目される。陳平はのちに名声を馳せた前漢高祖の謀臣である。だが若い時は兄・兄嫁と同居し、兄の家は「貧」で、三〇畝の田を営むにすぎなかったらしい（『史記』卷五六陳丞相世家）。この故事は、耕地面積約三〇畝の家が当時「貧」とされ、大人三人が生活するのに精一杯だったことを物語る。すると前漢初期の江陵・長沙付近の家々は、完全に自活できないほどではないにせよ、大半が「貧」だったことになる。そしてその平均的な生活水準は、三国時代にやや向上したことになる。また江陵鳳凰山漢簡に粟（＝禾^{あわ}）、長沙走馬樓呉簡に「米」の播種例がみえることから、漢晋代の江陵以北は粟作、以南は米作が多かったといえそうである。そうすると、長江中流域の農業技術の戦国時代～前漢前期における劇的变化は想定できないので、戦国後期の楚もそれと似たような作柄状況だったと推測できよう。

そこで、改めて漢代の粟作の収穫高をみると、宇都宮清吉氏は『史記』河渠書・『史記』貨殖列伝・『漢書』食貨志・『後漢書』仲長統伝・『淮南子』主術訓等に基づき、一頃＝粟三九六斛（新畝制の一畝＝三・九六斛）とす⁽⁴⁴⁾。すると三〇畝の年間収穫高は最大でも約一一九斛となる。そのうち最低一割を納税したとすると、約一〇七

斛が残る。ここで「秦律十八種」倉律（第一一六～一一九簡）をみると、戦国秦の刑徒（城旦・舂・隸臣・隸妾）にさえ食糧として毎月禾二石半～一石半（子供は一石半～一石）が支給された。また前漢後半期～後漢前半期の居延漢簡をみると、大男（成年男性）には三石、大女（成年女性）には二石強が支給された。⁴⁶『塩鉄論』散不足篇や崔寔『政論』も、成年男子の年間食糧を粟三六斛と見積っており、一般成年男性の食糧は年間三六斛程度、成年女性の食糧は二五斛程度とみて大過なからう。また子供の場合も、刑徒でさえ毎月一斛半～一斛が支給されているので、一般には二斛強（毎年二五斛）前後であろう。すると一般農民に四～五人の家族（成年男女と子供一～二名）がいた場合、家族全体では毎年八六～一一一斛が必要で、民の手元にはほぼ収穫が残らない計算になる。これは三〇畝で連作した場合の家計で、かりに一年休閑法を採用した場合、民の収入はさらに絶望的と思われる。しかも戦国魏・李悝「盡地力之教」によると、民には上記の支出以外に衣料費・冠婚葬祭費・祭祀費等の支出もあった。すると、渡辺信一郎氏がのべるように、「鄭里稟簿」所見の民の大半は貧民だったと考えざるをえない。⁴⁷また「嘉禾吏民田家荊」所見の民も、保有する米田面積は「鄭里稟簿」よりもやや多いが、早田率（その年の収穫の見込めない田の比率）が高いため、貧困に喘いでいたことになる。つまり、「鄭里稟簿」の住民構成は例外ではなく、江陵・長沙の民の農業収入は、前漢～三国呉を通して、絶望的でありつづけたわけである。すると戦国楚の農業技術が漢代と同等以下である以上、戦国楚の農村の平均的経済状況も、前漢～三国呉の時と同等以下だったと考えられる。

三・楚地経済圏の特徴

ところが、楚地経済関連の史料をみると、『史記』卷一二九貨殖列伝には、楚地の民が豊かな生活を営んでい

たとある。これは一体どういうことか。

之を總ぶるに、楚越の地は、地廣く人希にして、稻を飯にし、魚を羹にす。或いは火耕して水耨し、果隋・
羸蛤は、賈を待たずして足る。地執、食饒く、飢饉の患無し。故を以て芑廡にして生を偷み、積聚無くして
貧多し。是の故に、江淮以南に凍餓の人無く、亦た千金の家無し。

本史料によると、楚地には「飢饉の患無」く、多種多様な自然資源の産地だった。また楚人には一見、「火耕して水耨」の農民と他の産業従事者が別々に並存していたごとくだが、農業が赤字にもかかわらず、「飢饉の患」がない以上、実際には農民の多くも他産業を兼業できたのであろう。

では、楚地には農業以外に一体どのような産業があったのか。宇都宮清吉氏によると、前四世紀の中国には複数の経済圏が存在し、それを結ぶ世界経済圏が生まれつつあった⁽⁴⁸⁾。江村治樹氏も批判するように、戦国時代における世界経済圏の形成は過大評価できず、三晋地域以外はなお農業都市が多かったものの⁽⁴⁹⁾、宇都宮氏が「複数の経済圏」の存在を指摘した点は重要である。そこで、貨殖列伝をさらに厳密にみると、別稿でも論じたように、前漢前期には特産品を異にする複数の経済圏があった(図1)。それによると、楚は西楚・東楚・南楚よりなり、農業以外の多種多様な物産に恵まれていた。西楚・東楚はほぼ同様の物産を有し(呉経済圏)、南楚はやや独自の物産を有した(楚経済圏)。西楚・東楚・南楚は戦国楚に属したことがあるが、抜郢後の楚はおもに呉経済圏(西楚・東楚)のみを支配した。この点をふまえると、農業生産力の低い楚地経済が「果隋・羸蛤は、賈を待たずして足る。地執、食饒く、飢饉の患無し」と評された理由は明白である。楚人は農業以外の産業に重点を置き、それは多種多様な自然資源に依拠した。ゆえに彼らは飽食の生活に安住できたのである(『戦国策』宋卷四七一至七)。高級品に関しても、三晋へ遊説に赴かんとする張儀が「楚王、晋國に求むる無きか」と問うたのに対し、



【図1】『史記』貨殖列伝所見の经济圈

楚の懷王は「黄金珠璣犀象は楚より出づ。寡人、晋國に求むる無し」と喝破しており、まったく不足がみられない（『戦国策』楚卷一九三）。では、資源大国の戦国楚は、結局なぜ秦に後れを取ったのか。

第三節 楚地の都市経済

一・輸入置換の失敗

戦国楚は、豊富な自然資源を有しながらも、最終的に秦に破れた。秦は、経済力に裏打された軍事力と外交力を駆使し、戦国諸国を滅ぼした。ただし既述のごとく、戦国中期頃まで秦と楚の総兵力に大差はない。また装備の点でも、軍糧の点でも、大差は認められず、むしろ楚の武器は鋭利とされる⁽³⁰⁾。戦術面でも春秋楚で改革⁽³¹⁾が加えられて以来、中原諸国に比して楚を劣悪とする史料はない。両国ともに爵位制度を有し、

両国間に士気の差があったとも断定できない。『史記』をみると、紀元前二五〇年頃以降の秦軍は楚軍に比して異常に強いが、本稿冒頭で紹介した藤田勝久説によれば、史料の偏向の可能性もある。

そこで再度注目すべきが、各経済圏の所在と意義である。各経済圏の諸物産は異なる。よって、もし各経済圏を結ぶ遠隔商業を展開できれば、それは必然的に莫大な利益を生もう。逆に単一経済圏内での商業は、同一物産を同一地域内で売買するため、大きな利益は生じにくい。そこで戦国秦の状況を見ると、別稿で指摘したように、戦国秦は紀元前三〇〇年頃より関中経済圏のみならず、巴蜀経済圏・西羌経済圏をも支配し、経済圏間交易を積極的に推進した。一方、戦国楚は南楚（楚経済圏）と西楚（呉経済圏の西側）を中心に展開し、それ以外の経済圏を完全に領土内に組み込んだことはない。このことは楚の経済成長を阻害したと思われる。なぜなら楚は農業国というより資源国で、当該資源は他経済圏との交易を通じて、初めて莫大な利益を生むからである。つまり楚は、資源国ゆえに困窮に陥ることはないものの、豊かな供給源に応じた需要源を確保できなかったのである。しかも楚民は、国家に頼らずとも、各地の自然資源を活用し、十分に自活できた。よって、中央政府の楚人に対する規制力は強くなかった。当該経済圏における国家・大商人による経済利益の独占も困難だった。だから楚民は、戦争時などに逃散する傾向が強かったのであろう（前掲『戦国策』秦巻一〇四、魏巻三二八）。

現に、楚地には、春秋時代以来商人の存在は確認できるもの（『春秋左氏伝』宣公十二年等）、『史記』貨殖列伝や『漢書』貨殖伝をみるかぎり、遠隔地に股にかけて大商人は登場しない。そもそも北方に赴かんとする張儀が楚の懷王に、「天下、關を閉じて通ぜず。未だ見ゆる日を知らざるなり（『戦国策』楚巻一九三）」と別れの挨拶をしており、楚地の内外をむすぶ交易は規制されていたごとくである。貨殖列伝の成立した前漢武帝期になると、中原―楚地間の交通網は強化されたが、楚人は飽食状態になお安んじた。このように、地元の自然資源に

依存するのみで、それを活用して積極的に他地方の生産物を輸入し、さらにはそれを地産せんとする努力（所謂輸入置換）を欠く地域は、都市学的にその脆弱性が指摘されている。⁽⁵²⁾ そのような都市は、輸入置換による急激な経済成長・技術刷新・人口向上も見込めない。

二・楚の東漸と経済圏間交易

以上の分析によると、戦国初期の楚地では、輸入置換があまり円滑に進まず、ゆえに資源国にもかかわらず、都市の経済成長が進まなかった。

だが戦国中期の楚は、前三五四年前後に「睢濊の間」を取り（『戦国策』楚卷一七四）、前三三二年頃に睢濊上流の襄陵方面に進出した。これらの地は山東経済圏と楚経済圏の接点にあたる。また広陵に築城し（六国年表は懐王期に、平勢氏は威王期の前三三七年に繫年）、前三一九年頃に越王無疆を殺した。結果、「富は越隸を擅に（『戦国策』秦卷八三）」し、呉経済圏へ進出したとも解せる。しかも、楚の最前線は、前三二〇年～前三〇〇年頃には新城・陽人に達しており（『戦国策』楚卷二〇七、楚卷二〇八）、陽翟にも接近した（『戦国策』韓卷四〇五）。これらの地は、古来数多くの大商人を輩出した洛陽経済圏と楚経済圏との接点にあたる。すると、楚はこれらの領土拡大を通じて、経済圏間交易による経済成長の準備を整えつつあったといえよう。しかも包山楚簡によると、懐王期頃の楚は交易路に「關金（関所通過税）」を課しており、それは「王」の重要な財源のひとつだった。⁽⁵³⁾ 懐王七年（前三二〇年頃）の青銅製割符「鄂君啓節」も、楚の交易路が郢以北に放射線状に延び、楚王が車道・水路に通行税を課していたこと、鄂君の使者が免税符を携帯して郢で交易したことをしめす。ただし免税範囲は、太田麻衣子氏によると、楚の「安全圏」にあたり、⁽⁵⁴⁾ 「安全圏」外での経済圏間交易は当時必ずしも安全でなかっ

たようでもある。

しかし結局、楚は懷王中期に失速する。その最大の原因は、既述のごとく、懷王が張儀に騙された点にある。秦の密命を帯びた張儀は、秦のもつ「商於」の地と引き替えに、従前の斉楚同盟を解消するよう懷王に説いた。結果、懷王は斉との合従関係を解消したが、張儀は秦に復命後、楚を裏切り、「商於」の地を懷王に与えなかった（『史記』巻七〇張儀列伝）。ここで懷王の無能ぶりを指摘するのは容易い。だが本当の問題は、なぜ懷王が危険を冒して「商於」を求めたかである。『史記』の紀年矛盾を指摘した平勢隆郎氏によると、そもそも秦による「商於」略取は秦恵文王期に繫年されるべきで、秦の張儀は略取したばかりの「商於」を餌としたと考えられる。ゆえに楚の懷王も容易に騙されたという。⁽⁵⁵⁾この説によると、楚の「商於」に最初に手を出したのは秦の方である。その是非はともかく、それでは楚は、なぜ斉との合従を解消してまで、「商於」を取り返そうとしたのか。そこで「商於」の位置をみると、楚・巴蜀・閬中の三経済圏の接点に位置し、その失陥は南の上庸・西陵等の失陥にも繋がりにかねない。当時、楚―巴蜀間には密接な文化経路と物流があり、「商於」失陥はその断絶に繋がる恐れがあった。懷王が「商於」に固執した一因はここに存するのではないか。

ともあれその後、張儀に騙された懷王は、前二一二年頃に秦へ派兵して大敗し、楚將屈匄以下八万の兵を失った。前節の検討によると、八万は楚の西方防衛軍のほぼ全てに相当する。楚は、斉と決定的に対立し、斉や越に対する東方防衛軍を動かせない状況下で、西方防衛軍を失ったのである。とくに越は「越隸」と称される一方で、頃襄王期にも「東に越の累有^{わすらい}」（『戦国策』楚卷一九一）とも称されており、楚の完全な統制下にあったわけではなかった。別稿で論じたように、秦は当時すでに商鞅変法を通じて最初の大きな経済成長を遂げ、おそらく楚の西方防衛軍を上回る軍備を整えられたのであろう。かくて主力を失った楚軍は、漢中を失った。しかも秦は、

前三一六年に司馬錯を派遣して蜀を滅ぼし、前二八五年の内紛後に蜀を正式な県とし、前三一四年以前に巴も編入した⁽⁵⁷⁾。それによって、楚經濟圏と巴蜀經濟圏の連結はさらに弱化した。もつとも、前三〇四年頃に上庸は一旦楚に返還された。だが上庸以西と巴蜀はすでに実質的に秦に帰属しており、交易地としての上庸の価値は半減していた。しかもその後、楚の懷王は再び騙されて秦に囚われ、楚はしばらくして頃襄王を擁立した。その政治的混乱を突かれ、楚は洛陽南方の新城・陽人等を次々に失った。かくて楚は、このときに洛陽經濟圏との接点もほぼ完全に喪失したと考えられる。頃襄王は漢中回復を望み、このころから淮水く泗水間の地を得ようと望んでいたようだが、『戦国策』楚卷二一九、それももうまくいかなかったようである。

この頃、頃襄王の命で莊躡らが夜郎方面へ派兵されたとの史料もあり、楚はまだ巴蜀經濟圏に固執していたごとくである。だが『荀子』議兵篇には「莊躡起りて楚は分れて三四と爲る」とあり、莊躡が内乱して夜郎方面へ逃亡したのが真相のように思えなくもない。だがともかく、その後も郢付近の諸都市は「輸入置換」の困難により、劇的な勢威回復は望めなかったと思われる。現に、前二八〇〜前二七八年頃になると、楚は巴郡や黔中郡等を次々に失い、莊躡との通信も途絶した（『後漢書』卷八六南蛮西南夷列伝）。楚は長江中流域の回復を試みたが（『史記』卷四〇楚世家、睡虎地秦簡「編年記」、当地における楚の經濟成長はもはや望むべくもなかったといえよう。

その後、楚は陳を本拠とした。淮水流域はそれ自体が鉱物資源の宝庫で、楚は春秋時代以来そこに目を付けていた⁽⁵⁹⁾。しかも、宇都宮清吉氏や史念海氏も指摘するように、とくに淮北には「天下の中、諸侯四通し、貨物の交易する所（『史記』卷二二九貨殖列伝）」とされる陶をはじめ、東西南北の主要水路が交わる大都市が展開していた。このとき楚は、既述のごとく、すでに山東經濟圏と呉經濟圏の両方との接点を有していた。前二八八年頃には齊の攻勢により淮北を失いかけるが、燕が齊を抑え込んだ結果、その危機も脱した⁽⁶⁰⁾。しかも既述のごとく、陳

は洛陽経済圏と近接し、華夏諸国と「魚鹽之貨」を交換する窓口でもあった。よって拔郢後の楚は、経済成長の望めなくなった長江中流域や長沙以南ではなく、陳方面への重点移動を優先したのである。拔郢後の楚が長江流域に留まらず、突如陳へ遷都した理由は、ここに存するのではないか。ちなみにその後、楚は十分な国力を回復する前に陳を失い、前二四〇年頃に寿春へ遷都した。寿春も、呉経済圏と山東経済圏を結ぶ場所にある⁽⁶²⁾。

以上を総覧すると、東漸後の楚は、経済圏間交易による再起を図っていたと推測される。その裏付けとして、蟻鼻銭の存在にも注目される。蟻鼻銭は、楚特有の青銅貝貨である。鑄造開始時期に関しては諸説あるが、前三二二年頃に秦領となった漢中で出土せず、前二七八年頃に秦領となった雲夢で出土するので、その頃に流通し始めたと思われる。江村治樹氏によると、楚青銅貝貨の九四％は「𠄎」銘で、統一的発行主体の命令で一律に鑄造された可能性が高い。そしてそれは、経済の盛んな陳へ遷都した楚が大量の貨幣を要したために鑄造されたと考えられる⁽⁶³⁾。この見解は妥当である。これを経済圏の観点からいえば、蟻鼻銭出土地は呉経済圏（陳・寿春など）を中心に、楚経済圏東縁・山東経済圏南縁・洛陽経済圏東縁に分布し、蟻鼻銭の存在は東漸後の楚が主体的に経済圏間交易を推進した鉄証であろう。また戦国楚では「郢爰」等の有銘金版も流通し、やはり楚地東部で多く出土する。清華大学蔵戦国楚簡「楚居」をみると、悼王以前の楚は歴代十数回も遷都しており、春秋楚の武王期以来の新都にはほぼ全て「郢」字が含まれる。よって金版上の「郢」字がどの郢都かは不明である。だが「郢」字を冠する以上、当該金版も政府主導で流通したものとと思われる。

以上を総合すると、戦国後期の楚は、蟻鼻銭と金版を媒介とする経済圏間交易を促進し、新たに経済立国を目論んでいたと推測される。秦が懷王期以降連戦連敗の楚を最後まで恐れ、実際に楚がなお李信を破る程の力を有した理由は、ここに存するのではないか。ただし、王翦が秦のほぼ全軍を率いるや、さしもの楚も滅亡した。こ

のとき秦はすでに関中経済圏・巴蜀経済圏・洛陽経済圏・楚経済圏西部を支配する超大国となっており、楚の経済立国は間に合わなかったたのであろう。

おわりに

本稿では、戦国楚の敗因について検討した。戦国楚は、戦国七雄の中でも強国とされ、戦国屈指の資源大国であり、広大な土地をもっていた。にもかかわらず、最終的に秦に滅ぼされた。このような楚の敗因に関しては、従来さまざまな仮説が出されてきた。だが第一節によると、どれも検討の余地を残すものだった。そこで第二節・第三節では、両国の軍事的・外交的差異の背後に、経済力の差異があった可能性を指摘した。すなわち戦国楚は、農業生産力にはそれほど恵まれていなかったようであるが、それ以外の自然資源には恵まれていた。楚民は国家に頼らずとも、各地の自然資源を活用し、十分に自活できた。ゆえに、中央政府の楚人に対する規制力は強くなく、民は戦争時などに逃散する傾向が強かった。このような情勢下で、楚政府が大きな経済的利益を独占的に手に入れるには、自国の自然資源を、それが採れない他国の人びとに売却し、代わりに他の財物を輸入することが求められる。つまり、当時複数並存した経済圏（同一物産を産する領域）同士をむすぶ遠距離交易こそが、楚の中央政府に莫大な経済的利益をもたらすはずだった。しかし、戦国七雄のうち、複数の経済圏を最初に手中に収め、安定的な支配下に置いたのは、秦だった。楚は、巴蜀進出・中原進出に失敗し、東方呉越に対する支配もおぼつかず、それゆえ最後まで豊富な自然資源を戦略的に活用することができなかった。本稿では、ここに楚の敗因（の少なくとも一つ）があったと考える。

註

- (1) 『戦国策』の巻数は、林秀一氏校訂の新釈漢文大系版(鮑彪十巻本に基づき、姚宏校注本の巻数も付記されている)による。
- (2) 藤田勝久『史記』楚世家の史料考察」(『史記戦国史料の研究』東京大学出版会、一九九七年、三八五～四一六頁)。
- (3) Kakimura Yohei, "The Emergence and Spread of Coins in China from the Spring and Autumn Period to the Warring States Period", In. Bernholz, P. & Vaubel, R. eds. *Explaining Monetary and Financial Innovation: A Historical Analysis*, Springer, 2014, Cham. 以下本文中の「別稿」は本稿をさす。
- (4) 藤田勝久「史料学よりみた戦国七国の地域的特色」(藤田注2前掲書、四六七～四九〇頁)。
- (5) 鶴間和幸「漢代における秦王朝史観の変遷(一)(二)」(『秦帝国の形成と地域』汲古書院、二〇一三年、一八五～二二〇頁)。
- (6) 楊寛『戦国史(一九九七増訂版)』(台湾商務印書館、一九九七年、四三三～四六二頁)。
- (7) 舂山明「批評・紹介 楊寛著『戦国史(新版)』」(『東洋史研究』第四一巻第三号、一九八二年、五九二～五九九頁)。
- (8) 平勢隆郎『新編 史記東周年表——中国古代紀年の研究序章——』(東京大学出版会、一九九五年)の編年は、後掲『戦国史料編年輯証』等と比べて相当異なる。平勢説に従った箇所は「前……年頃」とし、大きな相異点は本文で明記した。
- (9) 孫焯「楚不用呉起而削乱」質疑」(『長江大学学报(社会科学版)』第二七巻第二期、二〇〇四年、一三～一六頁)等。
- (10) 岡田功「楚国と呉起変法——楚国の国家構造把握のために——」(『歴史学研究』第四九〇号、一九八一年、一五～三〇頁)、張正明『秦与楚』(華中師範大学出版社、二〇〇七年、一一八～一五六頁)等。
- (11) 楊注6前掲書(二一五頁)によると、「商」・「於」は二地名でなく、もともと「鄔(於)」と呼ばれ、当地に商鞅が封建されて以降、「商」と呼ばれるようになった。
- (12) 楊寛『戦国史料編年輯証』(台湾商務印書館、二〇〇二年)。以下本書所引史料を参照する場合、本書名のみしるす。
- (13) 楊興華「楚国滅亡原因新探」(『衡陽師專学報(社会科学)』一九九四年第四期、四一～四四頁)等。
- (14) 工藤元男「睡虎地秦簡よりみた戦国秦の法と習俗」(『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社、

一九九八年、三六三～三九五頁。

- (15) 工藤元男「卜筮祭禱簡」と貞人・貞卜」(『占いと中国古代の社会』東方書店、二〇一一年、一八八～二二二頁)。

- (16) 范常喜「戦国楚簡の祝日補議」(簡帛研究、<http://www.jianbo.org/showarticle.asp?articleid=1072>、二〇〇五年三月一日)。

- (17) 楊注13前掲論文等。

- (18) 工藤元男「日書」の発見」(工藤注15前掲書、三二～六七頁)。

- (19) 工藤注14前掲論文。

- (20) 春秋楚に関しては、君権を大とみる山崎道治「春秋時代楚国の政治改革」(『古代文化』第二四卷第一一号、一九七二年、二二一～二三三頁)等の説と、同時に君権の強まった莊王・靈王期以外は世族が強かったとする安倍道子「春秋時代の楚の王権について——莊王から靈王の時代——」(『史学』慶應義塾大学文学部内三田史学会)第五〇号、一九八〇年、三八九～四一〇頁)、齋藤道子「楚の王権構造に関する一試論」(『東海大学文明研究所紀要』第一〇号、一九九〇年、二三～三八頁)等の説がある。また郡県制の起源を春秋時代に見出し、春秋県を君権示現の場とみる説や、それに反対する見解もある。土口史記「春秋時代の領

域支配——邑とその支配をめぐる」(『先秦時代の領域支配』京都大学学術出版会、二〇一一年、一三～五五頁)等参照。

- (21) 楊注6前掲書、一九一～二七八頁。

- (22) 宇都木章「戦国時代の楚の世族」(『春秋戦国時代の貴族と政治』名著刊行会、二〇一二年、二六六～二九七頁)。

- (23) 盧昌徳「从吳起变法失败看楚国的衰亡——楚滅于秦原因初探」(『湖北師範學院學報』(哲学社会科学版)一九八七年第四期、七二～七九頁)。

- (24) 何浩「戦国時期楚封君初探」(『歴史研究』一九八四年第五期、一〇〇～一一一頁)、何浩「論楚国封君制的發展与演变」(『江漢論壇』一九九一年第五期、七二～七八頁)。楚封君の封地に関しては何浩・劉彬徽「包山楚簡の封君の封地」(『包山楚墓』文物出版社、一九九一年)等。

- (25) 野間文史「春秋時代における楚国の世族と王権」(『哲学』(広島哲学会)第二四号、一九七二年、八九～一〇〇頁)。

- (26) 斉思和「戦国制度考」(『中国史探研』中華書局、一九八一年)。

- (27) 陳偉「地域政治系統」(『包山楚簡初探』武漢大学出版社、一九九六年、六七～一〇七頁)。

- (28) 土口史記「包山楚簡の宮と宮大夫——戦国楚の行政単位と」郡県二(土口注20前掲書、九五～一二二頁)。
- (29) 鄭威「呉起変法前後楚国封君領地構成的変化」(『歴史研究』二〇一二年第一期、二四～三五頁)。
- (30) 岡田注10前掲論文。
- (31) 葛劍雄『西漢人口地理』(人民出版社、一九八六年)、林甘泉編『中国經濟通史 秦漢經濟卷』(經濟日報出版社、一九九九年)等。
- (32) 范文瀾『中国通史簡編(修訂本)』(人民出版社、一九六四～一九六五年)等。
- (33) 梁啓超『飲冰室文集』之十。
- (34) 桑原隲藏「歴史上より觀たる南北支那」(『桑原隲藏全集』第二卷、岩波書店、一九六八年、一一～六八頁)。
- (35) 江村治樹「戦国時代の都市の性格」(『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』汲古書院、二〇〇〇年、三六七～四〇二頁)。
- (36) 天長市文物管理所・天長市博物館「安徽天長西漢墓発掘簡報」(『文物』二〇〇六年第一期)。史料年代については、景帝期とする何有祖「安徽天長西漢墓所見西漢木牘管窺」(簡帛網 http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=488、二〇〇六年十一月九日)と、武帝期とする山田勝芳「前漢武帝代の地域社会と女性徭役——安徽省天長市安樂鎮一九号漢墓木牘から考え
- る——」(『集刊東洋学』第九七号、二〇〇七年)がある。
- (37) 荊州博物館「湖北荊州紀南松柏漢墓発掘簡報」(『文物』二〇〇八年第四期)、荊州博物館編「荊州重要考古発現」(文物出版社、二〇〇九年)、彭浩「読松柏出土的四枚西漢木牘」(『簡帛』第四輯、上海古籍出版社、二〇〇九年)等参照。
- (38) 工藤元男・早苗良雄・藤田勝久訳注(佐藤武敏監修)『戦国縦横家書——馬王堆帛書』(朋友書店、一九九三年、三三二～三四七頁)。
- (39) 「火耕水耨」の学説史に関しては渡部忠世・桜井由躬雄編『中国江南の稲作文化——その学際的研究』(日本放送出版協会、一九八四年)等。
- (40) 渡辺信一郎「二世紀から七世紀に至る大土地所有と経営」(『中国古代社会論』青木書店、一九八六年、一三二～二〇三頁)。
- (41) 種、稻・麻畝用二斗大半斗、禾・麥畝一斗、黍・荅畝大半斗、叔(菽)畝半斗。利田疇、其有不盡此數者、可毀(也)。其有本者、稱議種之。倉。
- (42) 渡辺信一郎「古代中国における小農民経営の形成」(渡辺注40前掲書)。
- (43) 阿部幸信「嘉禾吏民田家蒞「丘」再攷」(『東洋史研究』第六二卷第四号、二〇〇四年、六三二～六五九頁)。
- (44) 宇都宮清吉「僮約研究」(『漢代社会經濟史研究(補

訂版) 弘文堂書房、一九六七年、二五六～三七四頁)。

(45) 藤枝晃「長城のまもり——河西地方出土の漢代木簡の内容の概観——」(ユーラシア学会編『遊牧民族の研究』自然史学会、一九五五年)。

(46) 宇都宮注44前掲論文。

(47) 渡辺注42前掲論文。

(48) 宇都宮清吉「西漢時代の都市」(宇都宮注44前掲書、一〇七～一四〇頁)。

(49) 江村注35前掲論文。

(50) 『荀子』議兵篇等。『楚辭』九歌国殤も、勇敢で裝備に優れた楚兵が戦う様子を「呉戈を操り犀甲を被り、車は轂を錯え短兵は接す。旌は日を蔽い敵は雲の若く、矢は交ごも墜ちて士は先を争う」と表現する。間瀬収芳「蜀楚関係史への一試論——戦国時代出土文物を手掛りとして」(林巴奈夫編『戦国時代出土文物の研究』京都大学人文科学研究所、一九八五年、二三三～二六九頁)によると、戦国楚は強力な弩を中原以上に保有した。

(51) 安倍道子「春秋前期における楚の対外発展——『左伝』を中心に——」(『東海大学紀要文学部』第三輯、一九八〇年、一七～三〇頁)、安倍道子「莊王期における楚の対外発展——この時期の王権強化の動きとの関連に注目しながら——」(『東海大学紀要文学部』第

三六輯、一九八二年、一～一八頁)等。

(52) Jacobs, Jane, *Cities and the Wealth of Nations: Principles of Economic Life*, Random House, 1984, New York.

(53) 王穎「从包山楚簡看戰國中晚期楚国的社会經濟」(『中国社会經濟史研究』二〇〇四年第三期、一四～一七頁)。

(54) 太田麻衣子「鄂君啓節からみた楚の東漸」(『東洋史研究』第六八巻第二号、二〇〇九年、一五九～一九〇頁)。

(55) 平勢隆郎『史記の「正統」』(講談社、二〇〇七年)。

(56) 間瀬注50前掲論文は、前三七七年頃の蜀楚の政治的対立にもかかわらず、戦国期に蜀が急速に(秦文化以上に)楚文化を受容し始めた点を指摘する。そしてその原因として、高度な楚文化が蜀貴族の階級的要求に答えるもので、いわば身分表示の道具として有用である点と、楚が先進稲作技術を有した点を挙げる。

(57) 工藤元男「秦の巴蜀支配と法制・郡県制」(『アジア地域文化学』の構築) 雄山閣、二〇〇六年、二四～五二頁)。

(58) 「莊蹻の夜郎征伐」に関しては諸説あるが、早稲田大学長江流域文化研究所編『後漢書』南蛮西南夷列伝訳注(三)(『長江流域文化研究所年報』第三号、二〇〇五年、二五五～四二二頁)で諸説を列挙・整理

するとおり、頃襄王期の戦役であろう。ただし莊蹻が

滇に達したとする伝説に関しては異論も多い。『史記』

西南夷列伝・漢書 西南夷両粵朝鮮伝は莊蹻（≡莊豪）

が長江を遡って巴・黔中兩郡を征伐したとし、任乃強

『華陽国志校補図注』（上海古籍出版社、一九八七年、

三二三～三二五頁）は長江上流沿岸の塩泉争いとする。

一方、楊注6前掲書（四二〇頁）は、秦の巴蜀確保後（前

三二六）に楚が長江を遡上するのは不可能とする。徐

中舒・唐嘉弘「古代蜀楚的關係」（『文物』一九八一年

第六期）は莊蹻を貴人夷刃策の一例とする。

(59) 山崎注20前掲論文、安倍注51前掲論文（一九八〇年、

一九八二年）。

(60) 宇都宮注48前掲論文、史念海「釈《史記・貨殖列伝》

所説的、陶為天下之中、兼論戦国時代の経済都会」（『河

山集』生活・読書・新知三聯書店、一九六三年）。

(61) 工藤元男「戦国の会盟と符——馬王堆漢墓帛書『戦

国縦横家書』二〇章をめぐって——」（『東洋史研究』戦

第五三卷第一号、一九九四年、一～二三頁）。

(62) 戦国期の寿春を取り巻く環境・水利に関しては、村松

弘一「中国古代淮南の都市と環境——寿春と芍陂——」

『中国水利史研究』第二九号、二〇〇一年、一～二〇頁）

も参照。

(63) 趙德馨『楚国的貨幣』（湖北教育出版社、一九九六年）

等。

(64) 江村治樹「楚貝貨の性格」（『春秋戦国時代青銅貨

幣の生成と展開』汲古書院、二〇一一年、三二三～

三七二頁）。

